

悲しい昔話⑥ 一体化するということ

前回に続いて、昭和30年代の子どもと映画について考察いたします。

小、中学生のころ町に映画館はありましたが、それは専ら^{もっぱ}大人の娯楽施設であり、子どもたちがそう度々利用できる場所ではありませんでした。その証拠に2年に1回ほど、学校が許可する映画というのがあってわら半紙で印刷された許可証が学校から配られました。つまり、この許可証がなければ基本的には子どもは地域の映画館には出入りできなかったのです。もっとも、学校の許可証があっても親の許可が最終ハードルであったことは言うまでもありません。

では、いなかの子どもたちは2年に1回しか映画というのを見たことがなかったのか。「それはあまりにもさびしい、子どもたちがかわいそうだ、いい映画は読書と同様に子ども^もの心を耕すのだ。」と当時の校長が言ったかどうかわかりませんが、その代わりというのか年に1～2回、巡回映画というのがありました。映画を映す技師が、フィルムと映写機^{ひかえじよ}を持って学校にまわって来るのです。控所^{ひかえじよ}という今で言えばマルパルームのような集会室に暗幕を張って即席の映画会場にしました。完全な暗室ではないのもれて入ってくる外の光が室内のもうもうとしたホコリを映し出していたのを今でも覚えています。

さて、いよいよ上映です。本編が始まる前に5あたりからカウントダウンの数が映し出されます。子どもたちは声をそろえて合唱します。今から映画が見られる喜びを表す開会セレモニーです。

きっと、心を耕す映画をいっぱい見たのだと思います。覚えているのは東映の時代劇です。『悪者』と『いい者』という構図ができていて、悪者に追いつめられた善人がもうこれで万事休すという場面で正義の味方『いい者』が馬に乗ってかけつけるのです。それは「大川橋蔵」であつたり「中村錦之介」だつたりしました。

『いい者』が山里を馬で疾走する場面が映し出されると、期せずして子どもたちが拍手を送るのです。「早く行ってー」と応援するのです。前の方に座っている子は自分と『いい者』を同化させて、まるで馬に乗っているように体を揺らしています。そして、いよいよ峠にさしかかった『いい者』は馬の手綱を引き締めて悪者退治にいきなり峠を駆け下ります。ここで子どもたちの拍手は最大になります。

映画の解説をするつもりはありません。

いかに当時の子どもたちが純粋で単純であつたかということをお願いしたいのです。あのホコリの中で勧善懲悪に自分を一体化したので。東映の時代劇は「悪者には未来はない！」そして「君も『いい者』になるのだ」と思わせるこの上ない道徳教育でした。



巡回映画で育つたおじさんが毎週水戸黄門からのがれられない理由はここにあります。